

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

溝脇風子・教育認知心理学コース・修士課程2年

国際学会：The society for personality and social psychology annual convention 2026

参加地・期間：アメリカ合衆国・イリノイ州シカゴ・2026年2月26日～2月28日

発表題目：Evidence for a Universal Model of Prejudice: A Replication of Hehman & Neel (2024)

成果の概要

本支援を受け、アメリカで開催されたSPSP 2026 Annual Conventionに参加いたしました。会場には世界中から多くの社会心理学者やパーソナリティ心理学者が集まり、活発な議論が交わされる非常に熱気のある雰囲気でした。本学会において、私は以前から感銘を受けていた米国の先行研究を日本で追試し、その成果についてポスター発表を行いました。具体的には、人々の集団に対する偏見の程度を、様々な変数がどの程度の強さで説明できるかを検討した研究です。

学会参加の最も大きな成果は、追試した元論文の著者である先生と直接交流できたことです。元論文および私の研究の双方において、「集団に対する脅威」がその集団への偏見を強く説明するという結果が得られていました。しかし私は、そもそも「脅威」と「偏見」は概念的に重複しており、因果関係というよりトトロジ的な関係にあるのではないかという疑問を抱いていました。この点について著者の先生に直接見解を伺ったところ、現在の質問紙を用いた測定手法の限界として両者を完全に分離できていない可能性を認めつつも、概念としては明確に異なるものであるというお考えを伺うことができました。この議論を通じて、今後の私の課題は、各変数を質問紙のみに頼らない妥当な方法で測定することや、より因果関係に近づける実験的・縦断的な研究デザインを検討していくことであると再確認できました。

さらに、先生からは分析手法に関する重要なご提案もいただきました。今回の発表では日本のデータを用いて元論文と同じ手法でモデルを作成しましたが、「元論文のモデルそのものが日本のデータにどの程度適合するか」を検証してみてもどうかというご指摘です。これはモデルの普遍性を確認する上で非常に重要な視点であり、すぐに検討を進める予定です。

自身の発表以外にも、他の研究者の発表から多くの学びを得ました。特に印象に残ったシンポジウムでは、心理的特性を測定する際にそれが「誰に対する（対象）」「誰にとっての（主体）」ものなのかを考慮する重要性が議論されていました。例えば「協調的」という特性は単体で存在するのではなく、協調する相手がいて初めて発揮されます。特定の相手には協調的でも、別の相手には非協調的になり得るため、質問紙等において回答者によって想定する「誰」がぶれてしまうような曖昧な文言は避けるべきだという主張でした。この指摘には強く共感し、領域一般的な心理特性の存在を想定しつつも、対象や文脈への依存性を都度丁寧に検証する細やかさが、今後の自身の研究にも不可欠だと感じました。

その他、マインドフルネスの促進が顔魅力バイアスを低減させず、むしろ微増させる可能性を示した研究も非常に興味深いものでした。マインドフルネスは様々なバイアスを低減させる頑健な効果があると考えられてきたため、それとは逆向きの結果は顔魅力バイアスの特殊な発生プロセスを示唆していると考えられます。偏見や差別、そして顔魅力バイアスの双方に関心を持って研究している私にとって、大きな示唆を与えてくれる内容でした。

SPSPという大規模な学会に参加し、幅広い分野の発表に触れたことで、普段よりも広い視野から自身の研究テーマを見直すことができました。ここで見つけた多様な研究の種を深く考察し、実際の研究活動へと昇華させていきたいと考えています。最後になりますが、今回のご支援により、このような貴重な学びと交流の機会を頂けたことに心より感謝申し上げます。